『敦煌寫本研究年報』第九號（2015.03）163-172 頁

# 敦煌莫高窟とT型題字枠再論*

岩尾 一史

## 1．はじめに

本稿で扱うT型題字枠とは、敦煌莫高窟ならびに榆林窟で幾つか確認された特殊な題枠で、縦長の枠と横長の枠が組み合わされてT型になっており、縦枠には漢文、横枠にはチベット文が記される。このT形題字枠の存在は、はやくに黄文煥氏（黄 1980）が指摘したが、あまり注目を浴びなかった。その後2007年に出版された今枝由郎氏の論文（Imaeda 2007）によって、ようやくその重要性が學界に知られるようになったのである。

筆者は2010年冬から度々敦煌莫高窟ならびに榆林窟のチベット文題記の調査を行ってきた。その過程で幾つかのT型題字枠を調査する機會を得、ある程度の新見解を抱くに至った。そこで本稿では、この題字枠研究について筆者の見解と今後の見通しについて述べたい。

## 2．T型題字枠

まず先行研究を確認しよう。敦煌莫高窟にみられるいわゆるT型の題枠に初めて注目したのは黄文煥（1980）であった。彼は第365窟の本尊である七佛藥師像の臺座正面に記されたチベット文を發見し、それが横長の題字枠内に記されていること、そしてその下に縦の題字枠が置かれて漢文の題記が記されていることを指摘した。黄は次のように述べる。

> 漢文題記在下、呈竪矩形；藏文題記在上（位於佛龕下沿正中突出部分）、爲横矩形、與漢文題記垂直作“T”形。漢文題記多行、自右向左用墨字

*本稿は東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所プロジェクト「新出多言語資料からみた敦煌の社會」（代表：松井太・弘前大學文學部教授）ならびに科學研究費26300023（代表：松井太・弘前大學文學部教授）による成果の一部である。

> 竪寫在紅泥底上、有“洪辯”等文字、但無具體年月；藏文題記長約1米、高約60厘米、用墨字左向右横寫在黄泥底上、共三行。
>
> （黄 1980: 47）

黄は第365窟の特異な題字枠について報告し[1]、さらに黄はこのT型の題字枠がチベット統治期の敦煌特有の様式であること、同種の題字枠が第251窟の中心柱佛龕の西・南・北側と、第75窟の佛龕の下にも存在することを明快に指摘したのであった。ところが、この重要な指摘は學界の注意を惹かなかった。

黄氏の指摘が注目されるようになったのは2007年、今枝由郎氏（Imaeda 2007）によって、再びその重要性が指摘されてからである。Imaeda 2007は、まず楡林窟第25窟の主室西壁にT型題字枠が存在することに注目した。そして敦煌莫高窟にも同種T型題字枠が存在すること、そしてそれがチベット支配期に作成されたものに違いないことを指摘したのであった。この論文によってT型題字枠がチベット支配期特有のものであることが再び強調されることになったのである。この提起は特に中國の學界にて反響を引き起こした[2]。そもそもImaeda 2007は、M. Kapstein（2004；2009）によって提唱された楡林窟第25窟＝デガユツェルの會盟寺院（de ga g.yu gtsal gtsigs gyi gtsug lag khang）説の補強を一つの目的として提出されたものであるが、Kapstein説の是非をめぐり中國にて論文が出版されたこともあり[3]、結果としてT型題字枠の存在も知られるようになった。

今枝論文後、T字型題字枠について正面から論じたのが沙武田氏（沙 2011）である。沙は上で擧げた題字枠以外、新たに莫高窟93窟、第331窟の二例を報告している。更に第93窟については、沙・趙 2011、趙 2012によって詳細に研究され、T型題字枠が佛龕の屏風繪内に存在することと、第93窟自體がチベット文化の影響を多分に受けていることが明らかにされた[4]。

以上の研究により、現時點で學界に知られているT型題字枠は、莫高窟では第75窟、第93窟、第251窟、第331窟、第365窟の合計5窟、楡林窟では第25窟の合計1窟にあることになる。

## 3. ペリオの記録と現地調査

さて冒頭で述べたように、筆者は莫高窟・楡林窟等の現地調査を行ってきたが、その過程で上述の研究者たちが見落としていた研究に氣づいた。それは1908年に

[1]後に筆者も2011年冬と2012年夏に現地調査を行い、この報告が正しいことを確認した。
[2]また、中國語版もある（今枝 2009）。
[3]謝・黄 2007、黄 2009など。
[4]なお、沙武田氏の石窟研究については2013年に專著としてまとめられた（沙 2013）。

敦煌莫高窟を訪れたポール・ペリオ（Paul Pelliot）の調査記録である。ペリオが藏經洞（現在の第17窟）にて敦煌文書を三週間にわたり調査し、最良の文書と絹繪類をパリに持ち歸ったことは有名であるが、その合間を縫って莫高窟の調査を行っていたのである[5]。莫高窟調査記録は死後に活字化され、*Grottes de Touen-Houang: carnet de notes de Paul Pelliot*（Pelliot 1981-92）として出版されたのであった。この記録は詳細なものであり、石窟の形式、壁畫の様子から題記、後人の落書きにいたるまで廣範圍の情報が採集してあり、現在でも石窟調査には缺かせないリファレンスなのである。

例えばこのペリオの記録のうち、第398窟（ペリオ145c窟）には次のようにある。

> 【主室】奥の壁真ん中にある佛龕の前面に、黑色の題字枠にチベット語銘文とともに、赤地に黑の縁取りがある縱の題字枠があり、そこにはもう消えてしまったが漢文銘文があったはずだ。やや右下に似たようなチベット文銘文題記がもう一つ記されている。私の意見ではこれら題字枠はチベット支配期獨自のものであり、一般的な様式の窟では全くみあたらない。銘文は破損がひどくて讀み取ることができなかった[6]。
>
> （Pelliot 1981-92, vol. 5: 74）

佛龕の前にあるチベット語銘文題記とそれにつらなる縱の漢文銘文の存在、そしてこのような題字枠がチベット支配期獨自のものであることを、ペリオが明白に指摘していることに注意したい。そしてこの題字枠は明らかにT型を構成するのである。

それだけでなく他にも注意したいのは、チベット文銘文は「黑色の題字枠」（黑縁の題字枠を意味するのだろう）に、漢文銘文は赤地に黑線の縁取りがあること、そして何よりもこれら題字枠が壁面ではなく、佛龕の前面——具體的には臺座前面——に記されることである。この特徴はそのまま、黃1980が指摘した第365窟

[5]ペリオの旅行ノートを活字化した *Carnets de route* によると1908年2月26日に莫高窟に到着し（Pelliot 2008: 276）、翌27日から早速石窟調査に取り掛かっている（277）。3月3日、藏經洞に入り文書調査を始め（278-279）、3月26日まで繼續する（291）。翌27日に石窟調査を再開し、5月23日まで行っていたようだ（295）。同月27日、莫高窟を離れて敦煌に到着した（295）。餘談ながら翌28日に30歳の誕生日を敦煌で迎えている（295）。

[6]原文は以下のとおりである。“En avant de l'autel, sur [le] centre de la paroi du fond, inscription tibétaine dans [un] cartouche noir, avec appendice vertical, encadré de noir, mais cette fois sur fond rouge, et qui devait contenir une inscription chinoise aujourd'hui effacée. Un autre cartouche tibétain analogue a été dessiné et inscrit un peu plus bas et à droite. Ces cartouches sont pour moi caractéristiques de l'occupation tibétaine et ne se rencontrent jamais dans les grottes de style usuel. Les inscriptions sont ici trop endommagées pour que je puisse les relever.”

の題字枠にもあてはまることも指摘しておきたい。さらに、このようなT型題字枠は、ペリオの記録中の他の窟にも散見されるのである。例えば、第251窟（ペリオ103窟）については次のようにある。

> 佛龕の左面と背面の、佛像と小さく描かれた人の列の間には、第104a窟（＝敦煌研究院編號の第75窟．筆者注）の西面と同じくチベット文の横長の題字枠がある。このような題字枠は、私の知る限り古い様式の石窟にしか現れないが、元々のものではないもののかなり古く、おそらくはチベット支配期のものだろう。【佛龕】背面のチベット文題記の下には、元々あったのではないもののやはり古い縦長の漢文題記があり、（以下略）[7]。
>
> （Pelliot 1981-92, vol. 3: 41-42）

さらに、上の記事で言及された第75窟（ペリオの第104a窟）については次のように記録する。

> チベット銘文は佛龕の古い部分の上にあり、従って【窟の】改修の前のものである。しかし、はじめからあったものではない、というのもそれが古い漢文の題記にかぶさっているからである[8]。
>
> （Pelliot 1981-92, vol. 3: 42）

漢文の題字枠とそれにかぶさっているチベット文銘文が、（黄 1980）が指摘するところのT字型題字枠と同一であることは間違いなかろう。つまり、第251窟、第75窟のいずれにおいても、佛龕の前面に横長の題字枠にチベット文が記され、そしてその下には漢文の題字枠があったことがわかる。

さらに、筆者は2010年冬と2011年夏に第75窟を現地調査し、ペリオの指摘した題字枠を佛龕台座に確認した。チベット文銘文をもつ横幅の題字枠の下に、赤地に黒線で縁取りされた縦の題字枠も確認できた。ただし、他の縦題字枠と異なり、幅はかなり細い[9]。なお第251窟は現時點で未調査である。

ここで注意したいのは、第290窟（ペリオ121窟）の記述である。

[7]原文は以下のとおり。“Sur [la] face gauche et arrière de l'autel, entre les statues et la ligne de gnomes, des cartouches horizontaux tibétains [se présentent] comme à la face ouest de la grotte 104a. Ces cartouches, qui ne se trouvent, à ma connaissance, que dans des grottes de style archaïque, ne sont pas primitifs, mais doivent êtres très anciens et contemporains peut-être de l'occupation tibétaine (760-850). Au-dessous du cartouche tibétain de la face arrière [se trouve un] cartouche vertical chinois non primitif, mais ancien aussi,（以下略）.”

[8]“L'inscription tibétaine est au contraire sur la partie ancienne de l'autel, et par suite antérieure peut-être à la réfection; mais elle n'est pas primitive, car elle recouvre un cartouche archaïque chinois.”

[9]勘措吉 2009: 192 に写真があるので参照されたい。

佛龕前面の間仕切りのモールディングの張り出し部分に、第 101 窟様式の石窟のみでしかほぼ見ないような、黒色の線に圍まれたきれいな楷書體の 2〜3 行のチベット銘文がある[10]。

（Pelliot 1981-92, vol. 5: 11）

ここでは佛龕（中心柱の佛龕）の前にチベット文銘文があったことが指摘されているが、漢文銘文については記録がない。しかし實は、この銘文下にも縦長の漢文銘文が存在するのである。筆者は 2014 年 12 月に第 290 窟を實地調査する機會を得たが、そのときにペリオの指摘したチベット文銘文を、まさに佛龕臺座の前面にて確認することができた。筆者の記録によれば、テキストは 3 行である[11]。チベット文銘文の下には赤地で塗られた幅廣で多行の縦の題字枠があり、中にはほぼ解讀不能であったものの、漢字の跡がみられたのである。したがって、第 290 窟も第 251 窟、第 75 窟と同じくチベット文題記+漢文題記の T 字型題記が存在したことになる。なお、引用文中の「第 101 窟」とは敦煌研究院編號の第 249 窟にあたり、北魏時代に開削された小規模の石窟で、主室の奥に壁龕が設えられている。

同じく、第 305 窟（ペリオ 137d 窟）にも、

また注意すべきは第 101 窟様式の壁龕においてチベット文の黒色題字枠があることで、そこで間違いなくチベット支配期に屬すると結論できる[12]。

（Pelliot 1981-92, vol. 5: 53-55）

とある。ここにも漢文銘文の記録がないが、實際に筆者が現地調査をしたところ、チベット文題字枠の下には漢文題字枠があった。漢文題字枠は幅が細く、元々あった幅広の題字枠の上に描き直されたようだ。銘文は縦書きで「(1) 慈悲寶函寺請信佛弟子（2）呉興子一心供養」と讀むことができた[13]。ただし調査當時、迂闊にも色地について注意していなかった。

さらに、第 238 窟（ペリオ 87 窟）にも

佛龕前面にある題字枠の一部には、チベット銘文がみえる[14]。

[10]“Sur la corniche de la cimaise de la paroi avant de l’autel, il y a une de ces inscriptions tibétaines sur deux ou trois lignes, encadrées d’une large rai noire, et en belles lettres carrées, comme je n’en ai guère vu que dans des grottes de style 101. ”

[11]ただし、文字自體はほぼ解讀不能であった。確認できた文字は次の通りである。(1) ros [+-5] [-]ob’ [+-16] so’ [. . .] （2）[...] （3）[...] lo [...]。

[12]“ici encore on notera que cette inscription tibétaine à cartouche noir, au-dessous d’une niche, est dans une grotte de style 101, et on en conclura sans doute à la dater de l’occupation tibétaine.”

[13]『供養人題記』にもこの銘文は記載されている（敦煌研究院 1986: 126）。

[14]“En partie sur [le] cartouche en avant de l’autel, [on voit des] inscriptions tibétaines.”

（Pelliot 1981-92, vol. 2: 30）

とある。現時點で筆者は第 238 窟を調査する機會を未だ得ないが、上述の記録を踏まえると、この銘文の下にも漢文銘文が存在した可能性は十分にあるだろう。

ここで、上記のペリオの記述に筆者の調査記録を併せると、（a）チベット文は黒線の縁をもつ題字枠で、漢文は赤地に黒縁の題字枠が多い、（b）題字枠は佛龕に位置する、という 2 つの特徴をもった T 型題字枠がある石窟が複數存在することが判明する。それは、第 75 窟、第 251 窟、第 290 窟、第 305 窟、おそらく第 238 窟、そして（黄 1980）によって明らかにされた第 365 窟の合計 6 窟である。

## 4．T 型題字枠の種類

注意すべきは、同じ T 型題字枠とはいえ、從來注目されてきた楡林窟 25 窟のそれがこのような特徴を持たないということである。楡林窟第 25 窟の場合、題字枠は壁面に描かれ、縦の漢文題字枠は細く幅廣ではないし、赤地ではない[15]。また沙氏紹介の第 331 窟や第 93 窟の題字枠は、甬道南壁や龕内屏風畫にあるということから判斷すると、壁畫の説明として題字枠が付けられているわけだから、嚴密な意味では性質が異なる[16]。

では一方で、佛龕に付された題字枠の機能は何だろうか。殘念ながらチベット文題記も漢文題記も消えてしまっていることが多いのだが、例外として第 75 窟、第 365 窟のチベット文題記がある程度殘っているので、みてみよう。まず、第 75 窟の題記は次のようなものである。

（1）彌勒化身の御堂の施主
（2）楊ベンチョの rkyo[?] [...][17]

この題記による限り、佛龕に付された題字枠は窟の開削あるいは修復を行った「施主」、この場合は楊ベンチョの名前を記すためのものであることがわかる。また第 365 窟には、次のようにある。

[15]題字枠の写真は、中國敦煌壁畫全集編輯委員 2006: pl. 82 を参照されたい。

[16]第 93 窟の題字枠の写真と線画については、沙・趙 2011: 31-34、趙 2012、沙 2013: 336-341 を参照されたい

[17]筆者が現地調査をして讀んだテキスト原文は以下のとおり。(1) byams pa sprul pa'i gtsug lag khang gi yon (2) bdag yang beng 'co'i [rkyo] [—]. Cf. Iwao et al. 2009: 78. 写真：勘措吉 2009: 192。

（1）萬能の聖神ツェンポであるチツクデツェンの御代に、天子（＝ツェンポ）［...］供養として［..］全ての有情の福德［...］洪辯

（2）一家がこの御堂を壬子（832）年の春に設け、甲寅（834）年の冬［...］、［...］の仲冬に、佛像の開眼法要をした[18]。

周知のとおり、第365窟は敦煌佛教界の大物である洪辯を排出した呉家が窟主の、上下三層にわたる窟（第16・17窟、第365窟、第366窟）の第2層にあたる[19]。この題記によると、チベット支配期の832年開削、834年に完成したとのことである。この場合、題記の機能が石窟の縁起や開削時期を説明するためのものであることがわかる。

要するに、T型題字枠といってもタイプが2つあり、その相違點は大まかに言うと以下のとおりということになる。

| タイプ | 位置 | 縦題字枠の特徴 | 機能 |
|---|---|---|---|
| 1 | 佛龕 | 幅廣・赤地 | 窟主・開削期の説明 |
| 2 | 壁畫 | 幅細 | 壁畫の説明 |

ただし上の相違點はあくまでも目安であり、例外もある。例えば縦題字枠のタイプ1の特徴である幅廣であるが、全てが幅廣であるわけではなく、第75窟、第305窟は他の題字枠より幅が細い。

さて、ここでペリオの記録に立ち戻りたい。ペリオが度々言及するのが、これら題字枠が明らかに後で加えられたものであるということである。このことから、題字枠は窟の開削とは必ずしも關係がなく、むしろ窟の改修に關係するものであることが豫想できる。またこれに關連して注意すべきなのは、このような題字枠が「私の知る限り古い様式の石窟にしか現れない」（第251窟）というペリオの言である。實際に、現在まで判明している、題字枠が發見された莫高窟について一覽してみると、次のようになる。

[18]原文は以下のとおり。(1)/:/ 'phrul gyI lha [br]tsan pho / / khr[i] gtsug lde brtsan gy[I] sku r[i]ng la / / [lha sras —] s[ku] yon [du] / / [-mo? la phyag] [+-7] ['i] sems can thams chad gyI b[sod] [+-30] hong ben / (2) sgos / gtsug lag khang 'dI / / chu pho [b]yi [l]o'I [d]pyid na[s] b[ts]ugs t[e] / / shing pho stag gI lo'i ston [tshar? gyi? +-5 nas] / / st[o]n sla 'br[i]ng [–] la / / sku gzugs spyan phyed te / / zhal bsros so /

このテキストは2010年12月の筆者の調査と2011年8月の武内紹人、西田愛（いずれも神戸市外國語大學）、筆者との共同調査の結果に基づくもので、以前に出版したIwao et al. 2009：77よりも改善されている。なお、この後にもう一つチベット文銘文があるが、本稿とは無關係であるから省略する。

[19]Cf. 藤枝 1964: 91-106、石 1996: pls. 126-127, 139。

| タイプ | 窟番號 | 開削期[20] | 題字枠の位置 |
|---|---|---|---|
| タイプ 1 | 莫 75 | 盛唐（晩唐重修） | 主室壁龕臺座 |
| | 莫 238 | 中唐（西夏重修） | 主室佛龕臺座 |
| | 莫 251 | 北魏（五代、清重修） | 中心柱佛龕臺座 |
| | 莫 290 | 北周（宋重修） | 中心柱佛龕臺座 |
| | 莫 305 | 隋（五代、清重修） | 主室佛龕臺座 |
| | 莫 365 | 中唐（西夏、清重修） | 主室佛龕臺座 |
| | 莫 398 | 隋（五代、清重修） | 中心柱佛龕臺座 |
| タイプ 2 | 莫 93 | 中唐（清重修塑像） | 龕内屏風畫 |
| | 莫 331 | 初唐（五代、清重修） | 甬道南壁 |
| | 榆 25 | 8-9 世紀 | 主室東壁 |

この表から、タイプ 1 の題字枠を有する窟は早期に開削されたものが多くを占めることが明らかであり、古い様式の窟にこのタイプの題字枠が現れるというペリオの言も當を得たものであることがわかる。

上記の考察を總合すると、タイプ 1 の題字枠は多くの場合、窟を改修した際に改修主によって付加されたものであると考えるのが最も自然であろう。特に北魏の頃に開削された窟は、チベット支配期（786 年-848 年）には相當に傷んでいたはずであり、その頃に改修されたとしても全くおかしくない。とはいえ、改修だけではなく、第 365 窟のように開削時にも使用された場合もあったのも事實ではある。

ただし、ここで問題が生じる。タイプ 1 が開削期にも使用されたとなると、チベット支配期に開削された窟でも同じように T 字型題字枠が佛龕に見つかっても良さそうなものである。同期に開削された窟には、樊・趙 （1994: 特に 90 の表）によれば現在では合計 57 窟がある[21]。しかし、本稿でもとりあげた第 238 窟と第 365 窟を例外として、他のチベット期の窟からは T 型題字枠が見つかっていないのである[22]。また筆者もいくつかのチベット期の石窟を現地調査したのであるが、未調査の第 238 窟を除き、今のところ第 365 窟以外の例を見つけていない。これは一體如何なる理由によるものなのか、筆者はいまだ納得のいく説明を持ち合わせていない。今後の現地調査の結果を踏まえて、再度考察したく思う。

[20] 莫高窟の開削期は敦煌研究院 1982 に依據した。榆林窟第 25 窟の開削期がチベット期であることはおよそ研究者の一致するところであるが、細かな年代については意見が分かれる。沙 2013: 356-359 を參照されたい。

[21] また藤枝 1964: 17-18、史 1982: 181、沙 2013: 8-9 參照。

[22] 少なくともペリオの記録にもない。また、沙氏が最近出版したチベット支配期石窟の專著（沙 2013）にもそのような例はない。

もう一つの問題が、チベット文銘文と漢文銘文との關係である。例えば、第365窟の漢文銘文はチベット文とは異なり洪辯が念誦した『佛説回向輪經』であるということであるから[23]、漢文とチベット文が同時代のものであることは間違いないものの、その内容に關してはチベット文と一致するわけではなく、むしろ相互補完的なものであることが予想される。では、他の題字記に關しては如何なのか、今後の現地調査にて確認していく必要があるだろう。

## 参考文獻


［敦煌研究院 1982］　敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟内容總録』文物出版社

［敦煌研究院 1986］　敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社

［藤枝 1964］　藤枝晃「敦煌千佛洞の中興――張氏諸窟を中心とした九世紀の佛窟造營」『東方學報』35: 9-139

［樊・趙 1994］　樊錦詩、趙青蘭「吐蕃占領時期莫高窟洞窟的分期研究」『敦煌研究』1994-4: 76-90

［黄 1980］　黄文煥「跋敦煌 365 窟藏文題記」『文物』1980-7: 47-49

［黄 2009］　黄維忠「德噶玉采會盟寺（de ga g.yu tshal gtsigs kyi gtsug lag khang）考――再論該寺非榆林窟」『敦煌研究』 2009-3: 93-99

［Imaeda 2007］　Imaeda Yoshiro, “T-Shaped Inscription Frames in Mogao (Dunhuang) and Yulin Caves” 『日本西藏學會々報』 53: 89-99

［今枝 2009］　今枝由郎（著）張長虹（譯）「敦煌莫高窟和榆林窟中的 T 形題記框」『藏學學刊』5: 286-291

［Iwao et al. 2009］　Iwao, Kazushi, Hill, Nathan W., and Tsuguhito Takeuchi, *Old Tibetan Inscriptions (Old Tibetan Documents Online Monograph Series Vol. II)*. Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

［勘措吉 2009］　勘措吉「莫高窟第 75 窟藏文題記考」敦煌研究院 『敦煌吐蕃文化學術研討會論文集』甘肅民族出版社: 191-194


[23]梅 2003。また敦煌研究院 1982: 141-143、沙 2013: 29。

［Kapstein 2004］　Kapstein, Matthew K., “The Treaty Temple of De Ga G.yu ’tshal: Iconography and Identification.” 『西藏考古與藝術』*Essays on the International Conference on Tibetan Archeology and Art*. 四川人民出版社: 98-127

［Kapstein 2009］　Kapstein, M. K., “The Treaty Temple of the Turquoise Grove.” In M. Kapstein. *Buddhism Between Tibet and China*, Wisdom Publications: 21-72

［梅林 2003］　梅林「莫高窟第 365 窟漢文題記重録竝跋」胡素馨『佛教物質文化寺院財富與世俗供養』上海書畫出版社: 349-362

［Pelliot 1981-92］　Pelliot, Paul, *Grottes de Touen-Houang: Carnet de notes de Paul Pelliot: Inscriptions et peintures murales*. 6 vols. Collège de France, Instituts d’Asie, Centre de Recherche sur l’Asie Centrale et la Haute Asie

［Pelliot 2008］　Pelliot, Paul, *Carnets de route 1906-1908*, Les Indes savantes

［沙 2011］　沙武田「榆林窟第 25 窟 T 形榜題再探」『敦煌研究』2011-5: 28-34

［沙 2013］　沙武田『吐蕃統治期敦煌石窟研究』中國社會科學出版社

［沙・趙 2012］　沙武田、趙蓉「吐蕃人與敦煌石窟營建——以莫高窟中唐第 93 窟爲考察中心」『藏學學刊』7: 26-48

［史 1982］　史葦湘「關於敦煌莫高窟内容總録」『敦煌莫高窟内容總録』文物出版社: 177-202

［石 1996］　石璋如『莫高窟形』中央研究院歷史語言研究所

［謝・黄 2007］　謝繼勝・黄維忠「榆林窟第 25 窟壁畫藏文題記釋讀」『文物』2007-4: 70-78

［趙 2012］　趙蓉「莫高窟第 93 窟龕内屏風繪内容新釋」『敦煌研究』2012-1: 25-32, 132

［中國敦煌壁畫全集編輯委員 2006］　中國敦煌壁畫全集編輯委員（編）『中國敦煌壁畫全集 7 敦煌中唐』天津人民美術社

（作者は神戸市外國語大學客員研究員・非常勤講師）